

天皇儀礼空間の構築と忘却——一九三一—一九四六——

長 志 珠 絵

はじめに

モッセをはじめ、ヨーロッパ史を対象とした第一次世界大戦後の政治文化研究は集合的記憶の形成と統合装置の変容を考える上で興味深い。「愛国心」の対象として議論の多い無名戦没兵士の墓——戦死者モニュメントやその公的な追悼儀礼は、第一次世界大戦及びその後の欧米社会において場所や儀礼の整備を通じて社会が記憶していった。⁽¹⁾メモリアルデーも重要な役割を果たす一方、周辺の政治文化として国旗記念日や国歌もそれぞれの建国神話に関わって新たな再編がなされた。⁽²⁾こうした諸研究は、二つの点で重要な問題を提起している。一つは、対象に関わる問題だが、人々の大量死を前にした国民国家の新たな段階においては、従来のイデオロギー装置もまた新たな意味づけを必要とした点、二つ目には方法に関わるが、過去の時点で起

こった出来事の持つ意味は、その直後の社会、さらにはその後の社会との重層的な関係の束をときほぐす作業を必要とする点である。

日本の近現代史研究においても、「天皇制イデオロギー」装置研究は近年、その成立期と帝国の大衆社会が意識される時期との段階的な違い、量的質的違いが時に断絶として意識される段階にある。一方、個々のイデオロギー装置が果たした機能に注目する研究もまた第一次世界大戦後の社会状況との関係を重視する。⁽³⁾例えば近年では卒業児童数への注目を通じ、村の学校教育の「定着」を一九二〇—三〇年代とする新たな問題提起がなされている。⁽⁴⁾こうした成果は、「国民」教育を最も効果的な統合装置と考える視点に立った場合重要である。帝国「国民」を対象とした均質な教育空間が初めてリアリティを持つ一九二〇—三〇年代とは人々の大量死が日常化し、その意味づけが儀

礼行為の中に焦点化してゆく時代だからである。古びたイデオロギー装置の量的拡大は、当の装置の側にどのような変容をもたらしのたろうか。

加えて日本の場合、そうした「戦前天皇制イデオロギー」は、戦後との〈断絶〉をも前提とされてきた。今日、この点は細部での検討が必要な段階にあるだろう。占領期ではどのような文脈で何が否定されたのか。⁽⁵⁾

本稿では以下、主に天皇写真の地域での「普及」と「回収」に注目することで、天皇制イデオロギー装置の一九三〇年代―占領期を考えたい。

一 「国民礼法」というディスクール

天皇写真の「下賜」システムは明治・大正期では、村の尋常小学校に一斉配布することは目的ではなかった。籠谷次郎が明らかにしてきたように、帝国本土の配布システムはむしろ、特定の「学校」への配布を通じた選別秩序の形成が特徴であり、「下賜」の量的拡大は一九三〇年代の事態であった。⁽⁶⁾ 人々の間に明確な分割線を持ち込む「天皇写真」の配布が大量配布へと方針転換された際、どのような言説が必要とされたのだろうか。この観点からは、職場・学校といったパブリックな空間でのふるま

いの基準を設け、個々の身体の所作レベルに及ぶ儀礼行為を焦点とした『礼法要項』が注目される。⁽⁷⁾

一九四一年六月文部省編纂による『礼法要項』は、前編「礼法の基本」(全九章) 後編「礼法の要項―国家・皇室に関する礼法、家庭生活に関する礼法、社会生活に関する礼法」から構成される。前編「礼法の基本」一章「姿勢」に続き第二章「最敬礼」は「天皇陛下に対し奉って最敬礼を行ふ」と定義され、「先づ姿勢を正し、正面に注目し、上体を徐に前に傾けると共に手は自然に下げ、指尖が膝頭の辺に達するのを度(四十五度)としてとどめ、凡そ一息の後、徐に元の姿勢に復する。殊更に頸を屈したり、膝を折つたりしないやうにする」と一連の動作が細部にわたって言及されている。こうした身体所作への指針は「言葉つかひ」(前編五カ章)にも及ぶうえ、敬語の分節化も豊富で、「目上」や男女の線引きを強調する。また『礼法要項』は、その本文に解釈をほどこし、図や写真を豊富化したマニュアル書出版を伴う点も注目される。「解釈書」である限り、その個別の内容は幅を持つが、平易さを求めた新たな形式が編み出されていたのである。⁽⁸⁾ 注意しておきたい点は国家が人々のマナーを教える『礼法要項』は、礼とは何か?を説くテキストではなかったことである。多様な教化対象を前提とした規範はその差違を増幅し固定化する機能をもつと同時に、「礼」の対象に向

かう個々の身体を細部にわたって規制し、馴致させるマニュアル書であった。

だがマニュアル書という体裁をとる形式は、詳述する対象にも変化を持ち込む。ことに「礼」の対象は『天皇』及び『国家』と併称されるが、抽象度の高い国家と同様、「天皇」を礼の対象にする、という事態はしばしば分節化・具体化を伴った。例えば後編の「皇室・国家に対する礼法」全七ヵ章での「皇室」の具体化は一章「皇室に対し奉る心得」に典型的なように、天皇に関わるシンボリックな対象への言及であった。「拝謁」(2章)「行啓幸の節の敬礼」(4章)など「御座の正面」で「天皇」に直接対面、「最敬礼」(「拝謁」)する人々に関する記述もあるが、本文の構成上それほどページ数が割かれてはいない。天皇への敬称・敬語、勅令や和歌を「奉誦」する際の姿勢、学校では奉安殿(庫)の前を通る際の姿勢、新聞付録としての天皇及び一家写真の扱い、菊の紋章の取り扱い制限等、多様な天皇の代替物にどう向き合うか、そうした個別の例示が「皇室」への「礼」であった。

なかでも学校を場とした礼法「祝祭日」(六ヵ章)は、一九二七年の明治節の設置等、従来の一二祝祭日儀式の再定義に加え、天皇・皇后の写真への「最敬礼」を頂点に学校長を中心とした式日での学校儀式の次第や動作の細部に言及してい

る。学校での礼法の対象は当初から「天皇」ではなくその代替物としての天皇写真に焦点化されていた点に留意すべきだろう。

『礼法要項』を学校儀式に即して分節化するマニュアル書の一つ『学校礼法』を見てみよう。全五編の構成は以下である。
一編総説(一・二章)、二編式場の設備(一・二〇御真影、三〇勅語謄本、四・五)・三編儀式の次第(一・二・三卒業式、四入学式、五・六)、四編儀式行事作法(一御真影奉拝、二最敬礼、三勅語奉誦、四唱歌、五・六)、五編式場の整理(一・二・三・四・五)⁹⁾

このうち総説では、「儀式の教育的価値」を強調し、「式の中に立つものの用意」として天皇写真の「奉掲」と「最敬礼」、勅語の「奉誦」を位置づける。その詳説が続く四編第二章「最敬礼」では「御写真奉拝の際行ふ最敬礼は、天皇陛下に対し奉つて心からなる尊崇の情をあらはす礼式で、最も慎重に行はれなければならない」と明記した¹⁰⁾。学校儀礼の中心を「天皇写真」におくことを通じて、個々の身体所作のディスクールが確立しているのである。

では児童の保護者も参加する卒業式や入学式は儀式としてはどのような意味を持つのか。『礼法要項』の評価は「實祚無窮を壽ぎ奉」り、「天皇の大御心によつて行はれ」る学校教育と

いう恩恵の確認のための儀礼であった。天皇賛歌である君が代斉唱は、二つの「式」に共通し、冒頭に位置する。君が代の式次第上での順番や天皇写真への「最敬礼」だけをみれば、「小学校祝日大祭日規定」(一八九一)文中に文言があるが、「国民礼法」では、軍隊儀礼のモデル化(入隊式と除隊式)が明言された。この結果、地域財政負担によった「小学校」において、式運営の中心を学校長と明示する一方、結果として二つの式は差異化がもたらされた。

例えば入隊式儀礼から示唆される事項は「連隊長が之を行ふこと、軍旗を中心とすること、勅諭を奉読すること要するに天皇陛下の軍隊たるの意識が明らかになつて居る」ことであり、「国家の公事として考へる」入学式、すなわち入隊式に限って「此の日校門には国旗を掲げる」必要があるという。⁽¹²⁾逆に卒業式は冒頭の「国歌を歌ふ」以外は、「学事報告」「卒業証書を授与す」「学校長訓示」「卒業児童答辞」「卒業生卒業の歌を歌ふ」「修業生送別の歌を歌ふ」と進められ、「国旗」掲揚の必然性はない。各連隊の事情によつて個々に行われる除隊式―卒業式は、「学校の事情により、種々の行事が或は加はり、或は省かれ、順序も一様でなからうが、これは各学校の都合により、必ずしも全国同一の形で行はれないでもよい性質のもの」と⁽¹³⁾いった連隊の多様性を前提としていたからである。学校で卒業式に勅語奉読

をする例は、「軍隊の勅諭・勅語の奉読に対応」した例とみなされた。

この他方、もう一方の礼の対象―「国家」はどのように具体化されただろうか。

中でも『礼法要項』後編「皇室・国家に対する礼法」のうち、「祝祭日」や「軍旗・軍艦旗・国旗・国歌・万歳」は詳細である。個々のシンボルはそれらが機能する時空間と相互に意味を持つ上、軍隊の持つ儀礼文化との密接なつながりが強調される。⁽¹⁴⁾国旗をどのように議論するのか、この点で政府の議論の蓄積は貧弱だったが、⁽¹⁵⁾この点でも『礼法要項』は、「国旗は祝祭日その他公の意味ある場合にのみ掲揚し、私事には掲揚しない」「国旗はその尊重を保つに足るべき場所に、なるべく高く掲揚する」とする。ほか、旗竿・旗頭の位置が模索されたり、国旗と同じ竿に複数の旗を用いてはいけないといったような基準が提示されるが、当初から「外国の国旗及び国歌に対しても敬意を表する」使用場面が想定されるなど、米国を中心とした同時期の旗章学からの学習成果として理解すべきだろう。また『礼法要項』は天皇写真の「奉掲」位置も明記し、この例にならつて旗も向かつて左を正中とするが、⁽¹⁶⁾この点でもマニュアル書による図示の多さは必要な情報だったろう。

だが、このように分節化された皇室／国家は、儀礼の遂行に

関わる言説において相互の関係性があいまいなまま、軍隊モデルが織り込まれることとなった。ことに細部の形式にこだわったディテールで覆われるマニュアル書という形式は、こうした傾向を一層顕著なものにした。

中学生を対象とした『国民礼法』では、軍旗にならって、尊厳を保つための位置（高く掲揚）や外国旗との交叉、扱う目的、敬意を表するための細かな指示―「気を付け」「国旗に注目」「『国旗に敬礼』とは言はない」「直れ」といった一連の身体動作の規定や、「掲揚する場合、国歌を歌ったり最敬礼をしない」といった解説が加わっている。国民学校での「万国旗」は、竿を用いない装飾的な使用方法として戒められた。「国旗」とは「軍旗」をモデルとして情報を蓄積しているのであり、儀礼空間にはためくシンボルとしての形式が、軍隊モデルを通じて構築されていった、と見てよいだろう。

以上、天皇写真という国家儀礼装置の側は、帝国本国民の個々の身体がどのような所作で臨むべきか、その徹底をはかるための言説を新たに必要とした。ことに、近代学校制度の導入期、集団での一斉行動・一斉授業をはじめ兵式体操の導入など軍隊規律とその形式は学校のシステムのモデルであったが、一九三〇年代に成立するディスクール「国民礼法」は、個々の身体に「国民」のマナーを刻み込むという新たな課題から、再

び「軍隊」が個体にもたらす機能への注目を喚起する。一方、双方向的に今度は、忠誠を誓う対象に向かう個体を馴致するための装置として、儀礼空間に配置すべき個々のシンボルへの言及を始めたのである。¹⁷⁾

「国民礼法」の言説が豊富化する一九三〇年代とは、地域の学校の記録でもまた、大きな転換期である。儀礼の中心「天皇写真」配布とそのもたらした影響について、地域の史料を通じて見てみたい。「御真影下賜」の量的拡大は学校空間そのものを変容させ、イデオロギーの配置転換をもたらししていく。

二 昭和の学校儀礼空間の形成

(1) 「御真影奉載」

京都府宮津市域には大正・昭和期の学校日誌を始め、学校を主体とした多様な記録が残されている。¹⁸⁾ 大正末年、現宮津市域では旧藩校を系譜に持つ宮津尋常高等小学校を含め、「下賜」校は三校あった。さらに一九四五年度始めでは「下賜」校二校となる。うち、八校が昭和期大礼以後の配布であり、大礼による新規四校及び前述三校の一斉の「下賜」（一九二八年十月五日）¹⁹⁾以後、一九三三年に一校、一九三六年十月二十八日二校が「下賜」された（不明一校、但し奉安殿建設）。また天皇写

真をはじめ、昭和の学校空間を形成した奉安殿・国旗掲揚台・掲揚柱・楠公銅像・二宮尊徳像・忠霊室等が一九三〇―四〇年代に学校設備として建設されていた。⁽²⁰⁾ 以下では地域の「下賜」に向けた取り組みをみておこう。

府中村では一九二七年十一月七日、村の茶話会で「御大典ヲ永遠ニ記念シ奉ル」目的で、小学校の奉安庫建設を決め募金を募った。⁽²¹⁾ 日置校でも翌年一月三日、「御大典事業」として校長が同窓会に呼びかけ寄付金総額八二五円を得て奉安殿建設に着工し、一九二九年五月十八日に落成式を挙行了。⁽²²⁾ 上宮津村でも奉安殿工事は一九三二年三月に着工、七月竣工、翌年四月十八日、拝載式が行われた。⁽²³⁾ 大礼がきっかけとなり、奉安庫・奉安殿という容れ物が準備され、こうした計画が、「下賜願」の前提となっていた事例である。

さらに、近隣の学校が「御真影」をおしただいたことで個々の学校は共通する評価基準を持つこととなった。京都府視学による査察記録が残る日置校では、各教員の授業講評から昭和に入ると学校設備が評価の焦点となった。一九三四年七月二十日、京都府視学上村数馬は「奉安殿の状況は森厳である」⁽²⁴⁾ ことで学校設備の基準を満たしていたとした。翌年五月二十三日、府中校の記録では、「文部省より御真影奉安状況視察あり」⁽²⁵⁾ とある。一九三六年六月二十四日、宮津市域の諸学校校長による日置校で

の共同視察をしてみよう。項目は、「教育一般、経営方針」「体育」「設備」「教員研究」「教授方面」「青年学校」などで、「設備」を担当した吉津校の山段校長は、以下のように具体的な指摘を列挙している。

- ・ 講堂は雨天体操場と兼用のものが新築されており奉安庫も立派なものが出来てゐて校舎内外の清潔整頓がよく行き届いてゐる
- ・ 屋外の運動場も児童数に比べると相当大きなものである
- ・ 校舎の内部が立体的に利用されそれについてよく整理されてゐる。特に歯科施設、手洗い場の完備されて有る点は結構なことである
- ・ 奉安庫の土台が多少損じてゐるから村当局者に於ては早急に御修理願いたい
- ・ 掛図・地図等に遺憾なものが多少あるから漸次取換へられるやうな方針をとられたい
- ・ 化学実験器具特に児童実験器具が足りない
- ・ 裁縫室にミシンの設置を望み、各教室の塗板の取換へ幼学年教具（例計数器）等の設備をされるやう希望する
- ・ 体操用具器械の完備、ストーブをも少し安全なものにする⁽²⁶⁾ こと
- ・ 職員室の教師用机をも少し大きく立派なものにすること

・宿直室は通風採光に充分なる部屋を選ぶこととは最近喧しい教員の健康上大いに考へるべきことである⁽²⁶⁾

昭和初期の学校設備の様子と校長の視点による要求が興味深い⁽²⁷⁾が、ここでは軍隊生活に起源を持つ近代の規律「清潔」「整頓」や、この時期急速に整備される体育施設関連に加え、天皇写真下賜を前提とした「奉安庫」「宿直室」（この点後述）に主な関心が集中している点に注目したい。高等小学校は月単位での授業料を必要とし、全般的な設備が不足する一方、建設費用も嵩んだ奉安殿は二年後、一九三六年七月の土台修理の記録に加えて、一九四二年七月には全部塗り替えられた。

ところで「下賜」手続きは、学校長が管轄の上部機関（郡長↓府庁↓文部省）を通じて宮内庁に「下賜願」を提出、府県庁の学務課を通じて学校代表が受け取りに行く、という順序をふむ。宮津高等尋常小学校での記録は以下で奉載式は翌日行われた⁽²⁷⁾

「御真影拝載ノ為メ栗田助役、上杉訓導上府、御真影午後九時当駅御着職員高男奉迎直ニ奉安庫ニ奉安ス」（一九二八年十月五日）

学校には「下賜願」提出用に作成されたと考えられる関連書類が綴りとして残される。これらの書類からは安全対策や学校全体の管理マニュアルすべてが一新されていく様子が分かる。

世屋上校の記録には、一九三六年に府庁宛「御真影拝載ノ儀ニ付御願」の写しが残るが、以下「奉安所図」、「御真影並ニ教育勅語謄本奉護規定」、「宿直並日直規定」、「奉安庫図」、「学校配置図」、「第一及第二奉遷所位置図」、「自学校至各奉遷所距離書」の七点がその添付書類となっている⁽²⁸⁾。同校の「奉安所」とは講堂正面に場所を作り、奉安金庫（三〇〇円）を設置したものであった。注目されるのは学校宿直規定で、第一条では、「御真影並ニ教育ニ関スル勅語及其ノ他詔勅ノ謄本ヲ奉護シ校内諸般取締ノタメニ当直員ヲ置ク」と任務を定めた。また第七条宿直中の任務は「一 宿直の際は就褥前及起床後ノ二回、日直の際は午前午後の二回奉安所及校内外ヲ巡視スルコト・三 奉安所の鎖金會其ノ他諸鍵ヲ保管スルコト⁽²⁹⁾」とある。宿直制度の眼目が、天皇写真（御真影）と教育勅語の管理にあったことがわかる。特に緊急時には「奉遷所」が定められ、天皇写真を避難させる場所が確保されていた。

この他、栗田校には「御真影ノ奉仕規定並ニ勅語謄本奉安規定」が残るがこれは、一九三七年度以後の作成で天皇写真の管理に特化した規約である。第一条に「御真影ハ奉安殿内ノ金庫ニ奉安ス」とし、さらにこれらの「奉護」を職務とするのが学校長であり、勤務時間外では当直教員とした（第三条）。開閉や鍵の管理者も学校長職務とされた（四条、五条）。ここでは

第一奉遷所は栗田村役場で第二奉遷所が住吉神社社務所になっている。次いで一九三九年七月「与謝郡栗田尋常高等小学校防護規定」によって学校を単位とする自衛団とその規則が作成され、警備係任務の冒頭に「御真影ノ奉護に関する事項」がおかれた。さらに一九四三年以後、空襲の警戒体制に応じた「栗田国民学校自衛団細則」では天皇写真類の奉遷場所や順序、手続きは詳細を極めた⁽³⁰⁾。

天皇写真の下賜のもたらす影響は、儀礼の整備にとどまらない。学校長の職掌を浮上させた上、安全対策を通じ、学校空間にとって何が主要か、露骨な序列をもたらしめているのである。

(2) 学校と戦争・追悼儀礼

一九三〇年代後半、年度日誌の体裁を取る日々の記述からは、日露戦争も含め、戦争メモリアルデー行事の遂行に多忙な学校の姿がみえてくる。特に一九三七年七月以後になると、「南京陥落、午後三時半より全校児童旗行列を行う」(1937.12/11上宮津校)など「戦勝」行事をはじめ、日誌の行間は戦争情報で埋まる。軍事教練の導入なども、陸軍記念日に遂行された(1938.3/9、上宮津校)。宮津幼稚園でも漢口「陥落」を祝した旗行列に参加し(1938.10/28)、日中戦争開始二年後のメモリアルデーには「支那事变勃発記念日」としての「日の丸弁当」

を食べた(1939.7/7)。中国との本格的な戦争の開始は、人々の極めて身近な世界でおこっており、学校日誌の記述を根本的に変えた、と見てよいだろう。

学校日誌を通じて見ると、「戦争」の下支えは地域出身兵士との結びつきを通じてなされていた。

世屋下校の『学校沿革史』は一九三七―八年度の記述が詳しいが、一九三七年八月二十五日の動員令の翌日から出征兵士見送りが連日続くとあり、高等科女子による「奉公赤禪」作成(8/26)、児童全員による「低銃捧」作成(9/4)、「充員召集下令(本村第三回)」(9/10)等、銃後の対応が地域の兵士動員に即応していることが分かる。他方、十月に入ると「時局生活の日」(10/13)、「出兵将兵感謝日」(10/14)、「非常時経済日」(10/15)等、全国的な国民精神総動員運動下の連日の行事のなか、出征兵士を全校児童職員が見送る行事が始まった(12.10/25)⁽³¹⁾。上宮津校でも入営兵歡送式は学校の奉安殿前でなされた(1938.2/26)。

大規模校の宮津校は一九三二年段階ですでに「戦死者遺族並戦病者慰問週間」(5/23)や尋五以上による「本町戦死者墓参」「墓掃除」(5/26)が学校行事として行われている。ことに一九三七年度では、先の動員令に前後して、二度の出征兵士武運長久祈願祭が忠魂碑と郡の招魂祭が行われる亀ヶ丘神宮で行

われ、尋五以上児童が参列し(817、826)、体育館には神棚が寄付された(1938.12/14)。

ところで田中丸をはじめ近年の研究は、人々の身近な「英霊」祭祀とは、村の尚武会・在郷軍人会を主体とした「公葬」の場であり、学校講堂や運動場で祭壇を設けて行われていたとする⁽³²⁾。ここでの学校日誌・学校年度誌の記述においても、児童が参加する「戦争」行事のうち、出征兵士に関わる儀礼サイクルは一九四五年度まで繰り返し繰り返され身近な戦争行事だった。

学校講堂で村葬を行っていた養老校は動員令が出された八月中、連日の応召兵見送り(826.27.28.29.30.31)に加え、出征兵見送りの一方(9/12, 12/5, 1/24)遺骨五柱出迎え(1938.1/31)、村葬(2/12)が併行する。一九三八年になると宮津校では戦没兵士の慰霊の場が「本校講堂で町出身戦死者・・・三氏の町葬執行」(2/7)、といったように学校講堂で行われ、他にも「丹後五郡戦没者慰霊祭」(3/20)、「遺骨送還尋四以上出迎」(4/18)「講堂ニ於テ・・・上等兵町葬執行」(4/23)、「事変戦没者慰霊祭、尋六以上参拝」(5/3)と多様なレベルの兵士の追悼儀礼を担う「場所」として機能していたことを伺わせる。訓導の応召の際には全校児童が校庭で、高等科児童は駅構内まで見送った(5/17)。世屋校でも養老校を会場とした「支那事変戦病死者英

霊追弔大法要」(1938.4/1)に参加した。上宮津校での兵士の村葬は学校講堂ではないが、一九三五年十一月、上等兵の遺骨出迎えに児童代表が参加する記述が現れ(1/16)、一九四〇年八月以後は、しばしば遺骨を校庭で出迎えた。また慰霊祭は近在の盛林寺でなされた。ことに日中戦争下では、出征兵士への儀礼は「遺骨出迎え」中心である。全校二五〇人規模の日ヶ谷校の村葬の最初は、一九三八年二月十三日、村出身軍曹の弔いであった。この時から学校講堂を会場に高等科児童代表が参列し、一九四二年の紀元節行事では遺族を招待して「戦没者御写真掲揚」(1942.2/10)も行った⁽³³⁾。三〇人規模の木子校でも一九三八年駒倉出身の「英霊凱旋」を尋三以上が下世屋まで出迎え(9/4)、村葬協議会には校長が出席し(9/5)、世屋下校講堂で行われた村葬に代表児童引率参列(9/24)というサイクルの前後にも他村での兵士の村葬(9/15)、入営兵見送り(8/31)、出征軍人二名の飲送(9/19)と兵士の死の追悼儀礼に多忙な学校状況が記録される⁽³⁴⁾。

ところで地域出身兵士との関わりは同時に、留守家族・遺族との関わりをも意味した。「南京城陥落」の際、世屋校では「奉祝感謝の為、遺家族訪問」を行った(1937.12/13)。一九三八年夏以後、児童は奉仕作業に動員されたが、奉仕先が出征軍人の留守宅だったことは象徴的な意味を持つだろう。世屋校は

一九三八年、銃後援強化週間として「戦没軍人慰霊日」(10/6)、「傷痍軍人感謝の日」(10/7)、「出征軍人慰問日」(10/8)、「遺家族慰問日」(10/11)等を設けた。上宮津や養老校では六月二週目ごろから一週間程度の「全員労力奉仕のため応召軍人宅へ出張」(1939.6/15)が、やがて農繁期以外にも「応召家庭慰問」の他、「遺家族児童激励会」(1940.10/10)、「遺家族慰問相撲大会」(10/11)など出征軍人遺家族への日常的にケアが継続された。京都市内から疎開児童の付き添いとして共に農作業に携わった三〇代の男性教員は、地域の小学生、ことに高等科の男子児童の農作業の能力は労働補助の域を越えていた、と観察している。⁽³⁵⁾学区内の留守家族・遺家族への頻繁な訪問、「労働」提供を通じ、死者の顔や死者と関係を持つ家族・地域との直接的なコミュニケーションをなす「場」が作り出されていたのである。加えて奉安殿前での儀式は、戦没兵士遺家族と儀礼が交錯する象徴的な場所でもあった。上宮津校では、奉安殿前で戦没遺家族に対して「皇后陛下御歌、御紋菓の御下賜伝達式」が行われている(1939.3/16)。

最後に同地域の特徴として、舞鶴鎮守府の隣接による軍施設との密接な関係を挙げたい。⁽³⁶⁾栗田には一九三六年航空隊、一九四〇年海軍工廠が設置され、学校空間はこれらの施設と接点を持った。宮津港は軍艦の寄港が可能で、宮津校・宮津幼稚

園では軍艦進水式見学の記述が見られ、一九三四年には舞鶴鎮守府から司令官が来校して国防講話を行っている(3/18)。⁽³⁷⁾行事としては中部小学連合運動会が一九三六年の海軍記念日を祝して(5/28)栗田航空隊グラウンドで翌五月二十八日開催、以後一九四三年までつづいた(上宮津校、宮津校)。一九三九、四〇年には尋四以上が参加して、舞鶴航空隊でも開催された(上宮津)。他方、「福知山陸軍病院傷病兵慰問」(世屋校、1938.7/22)といった啓蒙的な行事はしだいに「福知山第二〇連隊歩兵砲中隊一六〇名馬一五頭宿泊」(宮津校、1939.5/18)となり、一九四〇年六月、養老校では臨時休業をとって、講堂で徴兵検査、理科室で四学区の学力調査を(6/10.11)、宮津校でも校舎の一部を貸した(1942.6/13-19)。栗田校でも「海軍砲術学校に校舎の一部を貸与」(1944.10「学校の沿革」)し、宮津幼稚園ではついに、一クラス分の教室を陸軍兵舎として貸与するため講堂の片隅を教室とした(1945.5/5)。

一九四一年、毎月八日が「大詔奉戴日」となり、アジア・太平洋戦争が始まると戦勝祈願(1943.木子)をはじめ、「サイパン島の英霊に應える祈願祭参列」(1944.7/22 木子)等、祈願行事に拍車がかかる。上宮津校では一九三七年度、二学期九月六日以後は毎週月曜日に神社参拝を行う方針を決め、一九四四年、丹後震災(1927)の翌年以後、安全一般論や震災犠牲者を主

題とした校長訓話が行われていた震災記念日行事は神社での必勝祈願と化した(1944.3.7)。

この間、上宮津校に残る日々の記録を綴った年度日誌は「訓練事項」欄が詳細になっていくが、兵士の追悼儀礼が続くなか、「共同訓練(礼の仕方、停止して行ふ場合、普通の礼、最敬礼)(1942.12/7)」、「奉安殿に対し正しい最敬礼をすること」(1943.12/1)、「最敬礼を正しく」(1943.2/7)、「最敬礼の仕方について」(1944.9/17)と記事が見える。学校という場所は、天皇写真が単独で存在したのではなく、これを包むモニュメンタルな容器物奉安殿や、『礼法要項』に基づいた身体規律の継続など幾重にも折り重なった儀礼体系を作り上げ、機能させていた状況がわかる。

「高等科ともなると体育の時間に教練が加わり軍国主義がよりきつい教育となり、校門の横には奉安殿という蔵を小さくしたような白壁の建物、その中には天皇皇后両陛下の御真影を奉安し登下校時にはその前で最敬礼、時には登校時日本手拭の白鉢巻姿で二列縦隊になり奉安殿前を『歩調をとれ』。頭左』の分団長の号令で校門をくぐったものである。又修身の時間ともなれば教育勅語、宣戦の詔勅を暗記させられた」(一九四一年度卒業 男性⁽³⁸⁾)

天皇写真を中核とした学校空間の完成の様が伺える。

三 戦中・占領下、儀礼空間の変容

(一) 天皇写真「奉遷」

この地域では一九四四年九月から空襲の記録が増え、一九四五年に入ると四月五月と空襲警報が続く、ことに七月二十日以後激しさを増した⁽³⁹⁾。京都市内からの集団疎開児童として日々空腹に悩まされていた女性の回想録によれば、寮になっていた円教寺の屋根の真上すれすれに戦闘機が飛びかい、爆音、爆風と大音響が轟く。大声を出さなかった理由は、「頭上を飛び交う飛行機の中の人影をはっきり見たから」という⁽⁴⁰⁾。ことに七月三十日、早朝より「小型機十数機来襲、宮津湾及市街地に投弾、機銃掃射」は市域に多大な被害を残し、宮津校では一年生女兒一名が「戦災死者」となった。だがその死について、追悼儀礼の類の記録は学校日誌からは見いだせない。あるいは増産作業に明け暮れる養老校では八月六日、初等科六年の児童が不発弾の葉挟で右手を「爆傷」したが、その後、この件の記述はない。

日誌記録の「空襲」記事に連動した動きは、「御真影」疎開や軍事物資の移動であった。宮津校では「桜山に御真影奉遷壕採掘作業開始」(1945.4/24)の翌日、「奉遷壕採掘作業奉仕」(4/25)が校長以下五名で行われた。七月以後の空襲は数度に及び激し

さを増すなか、八月一日、「上宮津校奉安殿」が「奉遷」場所となった。上宮津校には宮津工業学校(1896)、宮津高等女学校・宮津国民学校・宮津中学校(81)、吉津国民学校・栗田国民学校(82)各校の「御真影」が順次移され、各校輪番で「奉護」にあたった。⁽⁴¹⁾ 先述した栗田校の場合、「移遷」処置は「奉護」規定に沿ったものだった。

しかしながら、「奉遷」事業日時の決定は、地域の学校の判断ではない。この点について京都府知事と文部省官房秘書課長間の文書が残る。⁽⁴²⁾ これによれば、「奉遷」は京都市内の国民学校等(1945.3.19)で行われ、次いで三月二十六日、知事は「空襲時における御真影奉護対策に関する件」として、府下「防空重要都市」であった舞鶴町内の諸学校での「奉遷」願を提出、五月四日付で許可、六月十一日「舞鶴市に於ける奉遷実施」され、八月一日「福知山及び宮津町に於ても府私立学校御真影奉護対策に準じ奉遷」したという。

添付資料「宮津町に於ける御真影奉遷状況」(一九四五年八月一日)では、学校日誌に登場する六校分が「与謝郡上宮津国民学校奉安殿」に「奉遷」されたこと、さらに「奉遷」の際、「地方事務所教学課長、警察署長侍立、学校長奉持し教頭先導の下最寄警察官警護に当り実施」⁽⁴³⁾ したとある。地域行政が一丸となった「安全」対策の遂行が分かる。

他方、児童・教員の労働奉仕の対象もまた変化が見られる。疎開児童も含め、全校生徒が運動場の開墾や農家の水田増産動員といった厳しい労働に借り出される記事が続くなか、一九四四年、宮津国民学校の高等科児童少年団は供出用の縄を編み⁽⁹²⁷⁾、「運動用曳綱応召」⁽¹²²³⁾された。十二月、航空機資材倉庫用に「体育館応召」⁽¹²⁷⁴⁾され、初等科五年と高等科一年男子の労働奉仕によって郡是工場から糸糸機が運搬⁽¹²⁷⁹⁾、薄穂二六貫が東京陸軍被服本廠に発送⁽¹²⁷¹⁾、翌年にもヒマノ繊維六貫二〇〇匁が発送された^(1945.1.18)。上宮津校では栗田航空隊に倉庫として講堂を貸し、航空機の材料を運び込んだ^(1945.6.28『沿革史』)。八月に入ると宮津校では職員全員が出動し、「水源地奥町有林より防空資材搬出 グライダー着荷」^(1945.8.7)した。軍服に身を包んだ天皇写真を「正中」とし、奉安殿に「奉掲」することで儀礼空間を形成した学校は、軍事物資を再生産する場として機能していたのである。

(2) 占領期―「禁止」言説の構築

ではこれらの記録から、天皇儀礼を停止し、断絶点としての「戦後」はたちあらわれたのだろうか。空襲の激化によって、八月十日から登校しなかった二校では「終戦に関する詔書読式」(宮津校)、「四国共同宣言受諾に関する詔書」(上宮津校)

が十七日に行われ、記述上からは、「奉読式」形式の継続が伺える。また上宮津校では「神社参拝」(817)、八月二十日盛林寺での招魂祭(820、初五以上参加)、児童職員による兵士の遺骨出迎え(823)が継続され、その後も「村葬参列」(1945.12/19)、「復員軍人未復員家族慰安会開催」(1946.2/11)の記述が続く。戦死した兵士や遺族ケアについての記録は他でも多くみられ、府中校の「遺児激励会」(103)や養老校でも遺児激励会(103)、村葬(1215)に続き、進駐軍来校(1946.1/4)以後の一九四七年に至るまで村葬執行(1947.5/8)、九村葬、校長出席(9/1)、英霊出迎六名(9/30)の記事が続く。他方、宮津・上宮津校の年度日誌からは一九四六年の学校での「式」の記録として、一月一日 新年ノ拝賀式举行(宮/上) 二月十一日 紀元節式举行(同右)、三月二十一日 春季皇霊祭(宮)、四月二十九日 天長節(上)が、一九四七年十一月三日は「明治節奉賀式並新憲法公布記念式」とされる。神道指令はもちろん、一九四六年十一月には「公葬」に関する厳しい制限が出されていたが、日誌の記録からは、村出身兵士という限定付きながら、「死者への哀悼」が従来の公的弔いという形式を保ちながら継続されていたことが伺える。

とはいっても「授業停止延長指令」が出された八月三十一日以後、九月に入ると、学校記事は、二つの点で目をひく。一つ

は軍の保管物資の運び出しである。

八月三十一日に通知表が渡され、九月一日に始業式が開かれた上宮津校では、乾パンの配給(一人八〇匁、9/10)の他、栗田航空隊「保管物資搬出」(9/21-22)、「宮津警察署へ木刀・木銃・木薙刀供出」(10/22)、「航空廠に貸与の講堂の整理完了」(10/25)が行われた。宮津校では「進駐軍トノ座談会開催」(11/6)以後、同月二十九日に「小六水源地山に出勤」、翌日は「波路山に出勤」、十二月十日にも高等科児童が「木炭搬出のため上宮津村に出勤」、三十一日になってグライダーが「解体処分」された。

他方、各校の記録をつきあわせると天皇写真とその容れ物に関する動きは一斉になされている点で際だつ。まず天皇写真については二段階あり、空襲下で上宮津校に集められた天皇写真は「御真影奉護に関する協議会開催」(9/25)、府の課長が出席する中「解散式」(10/19)が行われた(上宮津校)。十月後半、再び各学校に戻されていたことが予想され、十一月三日、上宮津校では「明治節拝賀式」との記録がある。ところが同年十二月二十九日、今度は宮津校に集めての一斉の「奉遷」記録が見える(府中校・世屋下校)。その状況について、世屋上校の記録では、「御真影に関し其筋の指令により非公式返還し奉ることとなり昭和二十年十二月三十一日、学校長供御し奉り宮津国

民学校にて地方事務所院・宮津校教頭立会にて返還し宮津国民学校奉安殿に遷し奉る⁽⁴⁵⁾とある。日ヶ谷校では先に十二月二十日、先に地方事務所に集められた⁽⁴⁶⁾。由良校ではその経緯について「府の命令」によって、三代六人分の天皇・皇后写真を「奉還」⁽⁴⁷⁾したとする。数日後の一九四六年の学校での「式」の記録について世屋下校では「一月一日 御真影ヲ奉掲セズシテ新年拝賀式ヲ挙行ス」との記述が見える。

一方、奉安殿・奉安庫については翌年九月以後の撤去となった。世屋上校の動きがもつとも早く、後述するC通牒により、八月十六日に奉安金庫を撤出、職員室におき金庫としたほか、九月二日、奉安所が物置に転用された。上宮津校では「入札」し個人に「落札」した⁽⁴⁸⁾。由良校では一九四六年十月、「府の命」が出た後、村会議を経て十月三十日に毀し、建物は村内個人宅に遷した。奉安庫に替え、地鎮祭を執行し、一九四二年の天長節に奉安殿を建立したばかりの府中校でも十月撤去工事に着工、翌年四月十日に完了した。

ところで戦後の天皇写真と奉安殿についてだが、先行研究は両者の動きのズレを問題点と捉えず、もっぱら天皇写真「奉還」が言及されてきた。戦後の天皇写真については、宮内省の次官通牒をうけた一九四五年十二月二十日に出された文部省の地方長官通達―「御真影奉還に関する件、官30号」が知られる。

通知は新天皇服作成を前提に、速やかな奉還と元日の学校儀礼での不使用を求めたもので、佐藤秀夫は翌月後半から年明けの二月頃までかかって回収、府県庁で密かに「奉焼」が行われる一方、「奉還」が天皇写真の断念ではなく、一九四六年四月の「御写真取扱要綱」の存在等、宮内庁の強い意向によって学校中心の「新御真影の下賜計画」が模索されていた、とする⁽⁴⁹⁾。宮内省の新天皇服写真「下賜」計画は新聞でも報道された⁽⁴⁹⁾。

たしかに先の文部省通達は「将来新制定ノ御服装ニ改メラル」と新天皇服写真の下賜を前提とする。とするならば、宮津地域での天皇写真と奉安殿撤去とのずれはどのように捉えられるだろうか。

まず天皇写真の「奉還」は、十二月末の慌ただしさを考えると、同時期のグライダー処分も含め、一月以後の学校儀式での軍服の旧天皇写真の除去の意図が強く現れていると見てよいだろう。

他方、天皇写真の除去と奉安殿撤去の時間的なズレは、一地域の特殊事例にとどまるものではない。以下、節を改めて検討しておこう。

(3) 占領下の天皇写真・奉安殿

重要な点は占領下において、天皇写真と奉安殿とは政策レベ

ルで同じ扱いではなかったことだ。通達の主体について、前者が宮内省―文部省であるのに対し、後者については終始、神道指令に基いた措置であり、占領軍政策の一環として発せられていたからである。

では奉安殿をどのように取り扱うのか。文部省レベルでは、地方長官に向けた一九四五年十二月二十二日の文部次官通達「国家神道、神社神道に関する政府の保証、支援、保全及監督並ニ弘布ノ禁止に関する件」(学88号、以下Aとする)以後、四六年一月三十日の文部省学校教育局長通牒「神社形式を有する御真影奉安施設の撤去について」(学86号、以下B)、文部次官から官公私立大学高等専門学校長・地方長官宛で六月二十九日に出された「奉安殿撤去について」(学89号、以下C)の合計三通達が存在した。⁽⁵⁰⁾

AはGHQが十二月に発した神道指令に基づく実施要領として、全八項目の禁止事項が列挙された。第一項で学校内での「神道ノ教義ノ弘布ハ其ノ方法様式」をとわず禁止とされ、第二項では学校内での「神社参拝若クハ神道ニ関連スル祭式儀式及慣例」の挙行や支援が禁止された(留意点が五点列挙)。直接奉安殿に関わる個所は第三項目で以下である。

「三、学校内ニ於ケル神社神祠神棚大麻鳥居及注連縄ハ撤去スルコト、尚御真影奉安殿英霊室又ハ郷土室等ニ付テ

モ 神道的象徴ヲ除去スルコト

撤去の対象は「奉安殿」「英霊室」全般ではなく、「神道的象徴」に限定されている。この三項はしたがって理解しがたく、Bでは「神道的象徴」文言を削って、撤去すべき具体例五点(紋章、周囲玉垣、内部神棚様式、千木勝男木、屋根全部ヲ勾配五寸以下ノ住宅様式ニ改造、神道的象徴ハ一切之ヲ撤去)を明記した。建築物としての奉安殿における「神道形式」とは何か、部位に即した分節化がなされたのである。では、こうした措置を通じてコンセンサスは得られただろうか。実際には後述するように、奉安殿の扱いをめぐる地方軍政部と学校現場間にはしばしば軋轢が生じ、「事件」が起こった。

そもそもタブー視される「神道」とは何なのか。何が神道を象徴し、どのような行為が神道に基づいた「慣習」なのか。これらは境界線を設定する概念操作であるが、とはいえ通達内容からは統一された指針の欠如さえ伺える。例えばAの二つめの項目を見ると、留意点一で伊勢・明治両神宮への遙拝取止を明記すると同時に「注意 宮城遙拝ハ差支ナシ」とする。同じく留意点三で「氏神祭日等ニ於ケル休業日ハ之ヲ廃止」の一方、四「国祭日ニ対スル取扱ニ付テハ内閣ニ於テ考究中ナルヲ以テ追テ示アルベキコト」と態度を保留する。いわば従来行われてきた祝祭日である天長節に奉安殿の扉を開けて最敬礼し、

宮城遙拝を行う―といった一連の儀礼行為が寸断されている、と見てよいだろう。

これに対してCの特徴は校舎（学校敷地内）の内外に区分しながらも、以下のように奉安殿そのものの撤去を明記した点にある。

「一、校舎の外にある御真影奉安殿は神社様式を持つか否かの区別なく教育上の考慮を十分払ひつつすべて撤去すること。撤去が非常に困難なものはできるかぎり原形を止めないようにすること

二、校舎の内にあるものについては、撤去できるものは撤去し、撤去が困難でも金庫、倉庫等の他の目的に使用することが適当であるものに限り残存せしめ、その目的に使用すること

三、以上の措置の結果は大学高等専門学校に於ては文部省に、その他の学校は地方長官が取纏め文部省に報告すること」

C通達は、A・Bの延長線上にはない。校舎の内外という線引きをしつつ、均しく「奉安殿」は撤去と転用が明記され、建築物として変容が求められた。校舎の内外とする区分は、モニメントとしての奉安殿の性格を十分にふまえた措置だろう。誰の視線にさらされることが問題なのか、文部省の側でも織り込

み済みであることはあきらかだ。ともあれ何が神道指令に抵触する事項なのか、解釈に幅のあるAB通牒に対し、Cは確かに指針たりうる。そしてこうした解決策には背景があった。以下、史料紹介も兼ねてみておきたい。

（4）占領軍と「奉安殿」

国立公文書館には、COE宗教局長バーンズ少佐と文部省関野との交渉報告「御真影奉安殿に関する連合軍司令部との連絡事項（中間報告）」⁵¹が残る。この交渉の発端は、一月の文部省通達に基いて神社形式以外撤去しなかった山形師範学校長に対し、地方軍政部が「形式の如何を問はず奉安殿撤去命令」を出してきたため撤去予定である旨、電報を寄こした（G）⁵²。「事件」に端を発している。文部省は師範学校への回答としては、文部省としては神社形式以外の撤去は認めていない―と一月通達に沿って回答する一方、学校局長の意向として総務室長宛に「本件に関する連合軍最高司令部の意見向照会相成度」と照会を要請した。この結果、GHQ宗教課との懇談は都合四回（411、418、425）もたれ、この間、天皇写真及び奉安殿についての文部省の意向を示したGHQへの提出文書案件「連合軍司令部への回答ノ件」（416）が作成されている。先のC通牒はこうしたGHQとの合議をふまえたものと考えられるが、G

HQ宗教課とのやりとりを記した報告書での双方（宗教課バーンズと関野）の意見交換は実に興味深い。以下みておこう。

まず一回目、バーンズは以下のように述べた。

「御真影を奉安殿に置くこと、及びそれに敬礼することは普通の帝王に対する以上であり、又宗教的性質を帯びてくる。それで深刻な問題である。その点が司令部の考慮する要点なり。噂によると文部省では奉安殿以外の校舎の一部に丁度英国のキングの様に置き見易い処に置く意向だと聞く。本件は司令部にては地方の駐屯軍の解釈せる如く、神道形式でないものまでも取り除けと云ふ指令は出して居らぬ。しかし重要な問題だから今は司令部の見解発表の機会ではない。熟慮の上、司令部の見解を発表する。司令部の意向を駐屯軍に伝える前に文部省と協議したい。」

地方軍政部の動きを拡大解釈しつつ、司令部は現時点での見解発表を回避すると同時に、意向決定にあたっては、地方軍政部間ではなく、文部省とコミュニケーションの機会を持ちたいと申し出ている点は重要だろう。

ところで文部省の今後の意向に関する「噂」とは何だろうか。これに対して翌日関野は、稲田秘書課長から情報を入手し、そ

の後の会議の前提とした。稲田によれば、「軍装の御写真を天皇服の分と取りかへることにして居るが、現状では複製が多くは出来ぬので文部省で今日、学校に下付する予定は立てていない。噂云々は宮内省の内意で奉安殿奉安庫に置くことは今後なく、日常拝し得る場所に置き幕などたれない様にしたいといふ宮内省の内意あり」という。「キングの様に」とは奉安殿という容れ物と切り離れた新天皇写真を構想する宮内省の立場を示すものだった。

二回目の会談は、「噂」の实在を前提に進められた。

バーンズ少佐

「宮内省の意向が先日の新聞発表の如くである以上は、文部省も同じ様に考へるだろうと思ふ。文部省自身が取り除いた方が良くと云ふ様な措置をとうたらどうかと思ふ。独立した建物であるからそれを取り除くか或いは別の目的に使用したら良いと思ふ」

関野氏

「別の目的に使用した時には地方駐屯軍より抗議があるかも知れぬがどうだろうか」

バーンズ少佐

「別の目的に使用した時には撤去する必要なしとの命令が出

ない限り、その様なことが起こり得る。しかしその様な命令は出し得る、但しそれには時間が相当かかる。けれどもその前に左の3つの点について知りたい

1 宮内省の考へに対して文部省の考を知りたい(新聞発表の前に内意の通達は宮内省より文書課関野氏の処へあつた旨バーンズ少佐に話しテアルトノコト)

2 文部省は奉安殿をそのまま置くことを希望して居るか、或ひは取除いた方が良いと思ふかどうか

3 保存して置き度いと思ふならば、どうして、又どういふ目的で保存して置きたいか。」

この会談をうけて文部省は回答案を作成、三回目の会談の前に提出した。問われた三点だが、1については宮内省と同様であること、2については、一月通牒(A)に基づき非神社様式の奉安施設撤去の意向はないこと、3の理由としては奉安殿は堅牢なので撤去が困難、金庫・書庫等他の転用可能性をあげる一方、二の回答を回避した。

回答を受けて三回目の会談でバーンズは、1については「自分としては適當だと思ふ」と追認している。彼もまた新天皇写真作成に否定的な態度を見せなかった。しかし、奉安殿については、再利用の件について留保のうえ、地方軍政部の動きとし

て、「駐屯軍の方から地方の学校に対し早急に奉安殿を全文取り除くといふ様な命令を出すことは(東北地方山形県の例を除いて)あまり多くはないであらう」としている。最後となる四回目の会談でバーンズは、帰任中のダイク准将の意見を報告した。これによれば、ダイクは「奉安殿といふ名前から言ふても構造からいつても神社の役目をせぬとも限らぬからその点研究する余地あり」とし、私見として「残すなら使途ははっきりさせた方が良いと思ふが早晩、撤去した方が良い」と述べたという。問題の焦点が奉安殿に向けられていたことが分かる。

この二ヶ月後にC通牒が出されるが、奉安殿の取り扱いをめぐる日本政府―文部省側の判断がGHQとのやりとりによって合意され、形成されていたことは明らかである。と同時に、奉安殿撤去の議論が新天皇写真の扱いと関係つけて議論されていた点も注意を要する。占領軍側においても戦前天皇制儀礼をめぐる時空間が均一に否定されるものではなく、文部省や宮内省の動向は、占領軍政策の隙間をつく仕方ではなく、互いの情報や意向を確認しあいながら進められていたのである。

もっとも占領政策によって否定的対象とされる行為や対象は何なのか。その線引きが極めて高度な政治性を帯び、占領軍と政府担当部局との相互のコミュニケーションによって合意されていったとするならば、そうした事情や情報を共有しない地方

軍政部と地域の学校現場間は常に軋轢を生じる構造にあったことも同時に指摘できるだろう。このため通達の解釈は幅を持つ上、実施の細部については時間差も含めた地域差が生じた、と見てよいだろう。明確な指針がないなか、地方軍政部がどのような意向にあるのか、この点を「事件」の前例から情報として入手し、それぞれの文書伝達ルートを通じて「奉安殿撤去」という結論を伝達していく必要があったからである。

例えば八軍政管轄の秋田県では、C通達を七月十六日付秋田市長が各小学校長宛てに出した文書では、前文で県内務部長からの通牒で「速急これを撤去」としつつ、「若し希望者がありましたら払下の有無をこの二十日まで御報告下さい」とわざわざ前書している⁽⁵²⁾。

同様に、地域行政の側でリスク回避の徹底した方策が、処された可能性もある。B通牒の後の一九四六年二月、八軍制管轄下の福島県では、二十三日付での福島県内務部長から各学校長宛に出された「御真影奉安施設ニ関スル件」が存在する⁽⁵³⁾。ここでは明確に、「今般進駐軍情報部ヨリ再度指示注意有之」ため、「緊急措置ニ対シ万遺憾ナキヲ期セラレ度」と具体例が列挙された。例えば「奉安庫」での勅書類いっさいの撤去や奉安施設への児童・職員の敬礼停止にとどまらず「校内ヨリ宮城並ニ御親閲ニ関スル御写真等ヲ撤去」や青年団・在郷軍人会の旗幟の

撤去、「校舎内外ヲヨク検討シ一切ノ軍国主義的象徴ヲ速急ニ撤去スルコト」が求められている。明らかに後のC通牒より踏み込んだ内容が示されていたことが分かる。

こうして見てくると、宮津の天皇写真と奉安殿撤去のズレもまた、一地域の特殊な状況というよりは、奉安殿／天皇写真という戦前儀礼空間においては密接に絡まり合った対象が、占領期という特殊な状況の中、それぞれ異なる文脈でいくつものバリエーションがかりながら選択された政策の中で生じた事態だったと考えられる。

また新天皇写真については、占領軍とのやりとりで積極的な発言を残していない文部省ではあるが、天皇儀礼の放棄に積極的ではなかった事情は、これまでの動向の中からも指摘できる。B通牒の但し書き、「宮城遙拝」の文言はC通牒前後では撤回されなかった。特に「国祭日」の保留について見ると、例えば一九四六年八月、北海道庁長官が校地内の行幸啓記念碑の取り扱いと祝日の学校儀式挙行について文部大事官房秘書課長に照会した件では、前者については「撤去に及ばない」が、祝日に於ける儀式挙行については文書は何度も書き直しや書き入れの跡が見え、結局九月二十一日付の回答案で、「目下考究中に付別途指示」と書き入れがある⁽⁵⁴⁾。

ではC通牒とその実践に対し、文部省の「事件」への対応は

変化があっただろうか。

鳥取県では、六月の通牒Cに対応して村の遺族会に無償で払い下げ、村はずれ畑中で「忠霊塔」としたところ、十二月になって軍政部の学校視察の際、一―村長の関与、二―移動の際の学童使用、の二点が問題となり、現在取調中なので指示を仰ぎたいとする伺い書が県教育民生部長から文部省文書課長宛に提出されている⁽⁵⁵⁾。学校と村の戦没兵士―英霊家族との関わり、村長・学校児童の協力、といった構造はまさに、天皇写真を核とした儀礼空間の中で要請された形式だったことは明らかだろう。

鳥取県の担当者は、「忠霊廟にすることは不可であるかどうか」「「慣例」とはどういふ意味か」「奉安殿の位置をかへないで倉庫に改造したものは不可であるか」に加え、「「慣例」解釈に関わって、学校内や村内各所の国旗掲揚台のコンクリートの台に「国威宣揚」の文字を彫刻している例についても刑事課より相談を受けており、この点についても回答が欲しいという。要するに通達Aに遡って、第二項の学校内での「神社参拝若くハ神道ニ関連スル祭式儀式及慣例」の「「慣例」とは何か、解釈が共有されていないのである。従来の慣例の何が「神道」慣習にあたるのか、現実の地方軍政部という力の前に現場の学校が混乱をきたす状況はC通牒以後も継続されている。

ところがこの案件について文部省の回答文書の対応は厳し

い。まず「単に私的な遺族会が、独自で忠霊廟を造営維持することは差支ないが村が国民学校の御真影奉安殿を無償で遺族会に払下たこと及び児童をその移転に使用したことは、穩当を欠く」とした。軍政部の逮捕を妥当と見たのである。さらに「国威宣揚」文字については削除を進めながらも、「「慣例」解釈については、明確な態度を示さなかった⁽⁵⁷⁾。

C通牒が出されて以後のこの例において、文部省の奉安殿撤去の実践をめぐる態度が厳しいものであったことは重要な意味を持つだろう。占領軍の意向をふまえてABを拡大解釈させた奉安殿の「撤去」とその徹底を地方軍政部の側にたって後押しする態度は、新天皇写真の存在を前提にする一方、論理としては、なぜ奉安殿撤去に限定して特化されるのか、必ずしも明らかではなかったといえるからである。

前章で見てきたように、戦前の天皇写真を核とした儀礼空間とは、奉安殿が単独に建立されることで成り立つものではなく、時間・空間を取り巻く多様な儀礼装置相互の相関関係によって構築されていた点に特徴を持っていた。「宮城遙拝」を認め、天皇関連の祝祭日を認め、新天皇写真の配布計画を明記することとは、物神化された天皇表象の否定になるだろうか。むしろ多様な解釈をもたらすだろう。だが奉安殿に限っては、「神道」すなわち軍国主義にカテゴライズされた。一般に戦争の記憶を

めぐる抗争はしばしば何らかの形を持つモニュメントをめぐる
てなされる⁽⁵⁸⁾。奉安殿という建築物が抗争の焦点とされたこと、
さらにその撤去を徹底させるという二重の概念操作は、奉安殿
とは実は容れ物だった(だから中核は別にある)——という過去
をも操作されている。天皇イメージの再生計画と抱き合わせの
パートナー取引的な「撤去」は、そもそも奉安殿の中には何があっ
たのか?を忘却させるとどまらず「戦後」社会に向けて、戦
争のシンボルに関わる記憶の混乱と抗争、空白をもたらすだろ
う。

政府担当局はGHQのCIE担当官とコミュニケーションを
取りながら、具体的な境界線を模索していた。本稿で明らかに
してきたように、対外戦争の中で構築された「天皇写真」を核
に縦横にはりめぐらされたイデオロギー装置——「慣習」は、占
領下、その質において、画一的に否定されたのではなく、様々
なグラデュエーションを持っていた。一九三〇年代以後、比較
的短期間に急速に受容されていた「慣習」の束は、占領下を
経てどのような断片化を伴いながら変容し、新たな文脈と組み
合わせを得て再構築をはかるのだろうか。あるいは、時期や人
脈、部局によって政策態度に偏差を伴うとされるGHQ像だが、
この図式は政治文化を通じて見た場合でも同じ特徴が指摘でき
るのだろうか。今後の課題としたい。

〔註〕

- (1) ジョージ・L・モッセ『英霊——創られた世界大戦の記憶』宮
武実知子訳、柏書房、二〇〇二年、E・ホブズボウム『ナショ
ナリズムの歴史と現在』浜林正夫、嶋田耕也、庄司信訳、大月
書店、二〇〇一年等参照。
- (2) J・ボドナー『鎮魂と祝祭のアメリカ——歴史の記憶と愛国主
義』野村達朗ほか訳、青木書店、一九九七、p・ノラ『記憶の
場——フランス国民意識の文化——社会史』谷川稔他訳、岩波書
店、二〇〇二—三、モッセ『大衆の国民化——ナチズムに至る政
治シンボルと大衆文化』佐藤卓己・佐藤八寿子訳、柏書
房、一九九四年等参照。
- (3) 天皇制研究と関わっては例えば、原武史『可視化された帝国
——近代日本の行幸啓』みずす書房、二〇〇一年参照。
- (4) 清川郁子『「壮丁教育調査」にみる義務制就学の普及』『教育
社会学研究』五一、一九九二年、同「近代日本の農村部におけ
る義務制就学の普及——公教育の成立と社会構造——」森田尚人ほ
か編『教育学年報2 学校規範と文化』世織書房、一九九三、
大門正克『民衆の教育経験』青木書店、二〇〇〇年、土方苑子
『近代日本の学校と地域社会——子ども達はどう生きたか——』東
京大学出版会、一九九四年、同『東京の近代小学校——『国民』
教育制度の成立過程——』東京大学出版会、二〇〇二年。
- (5) 占領軍の「軍国主義の否定」は、高度な政治操作を想定する
必要がある。「国旗」掲揚を例に取ると、占領軍はCLOを通
じた「許可」システムを作り上げることで逆に、国祭日をはじ
め、ナショナルシンボルとしての掲揚のための意味空間を操作
する一方、国旗への忠誠心の現出方法等、ナショナルシンボル
の持つ高度な政治性を政府に積極的に「啓蒙」した。この一連

のシンボル操作は軍旗 (ensign) としての日の丸と国旗 (National Flag) を概念操作することを通じて行われた。長「戦争シンボルの転換と占領の記憶―国旗とGHQ―」(ひろたまさき、キャロル・グラッグ編『歴史叙述の臨界』巻2、東京大学出版会、近刊予定)

- (6) 籠谷次郎『近代日本における教育と国家の思想』阿吽社、一九九四年、佐藤秀夫「解説」『続・現代史資料』(8) 教育 御真影と教育勅語Ⅰ(みずず書房、一九九四)、籠谷「大正期京都府学校における御真影・教育勅語の存在形態―一九二三年京都府内務部調査の分析―」『社会科学』五五、一九九五年七月。

- (7) 熊倉功夫『文化としてのマナー』(岩波書店、一九九九年) は日露戦争以後の礼法書の検討を通じ、一九三〇年代を社会に向けた礼法書が急激に増加する時代とし、『礼法要項』を頂点に位置つけた。天皇に限定された「最敬礼」の確定が翻訳概念であった「立礼」に形式と序列をもたらしした。パブリックな空間での人々のマナーに関して国家が指針を設けたのである。

- (8) 例えば『昭和国民礼法』(中上川義一郎編、帝國書籍協會、一九四一)、『国民礼法に拠る子供の躾』(武田武市、弘學社、一九四一)、坂本豊『女子国民礼法図絵』(進学協會、一九四二)、『実践女子国民礼法』(川島次郎、中文館編、一九四三)、『大東亜礼法心得』(加藤将之、明治書院、一九四三)等は図示・写真が多い。

- (9) 川島次郎『学校礼法 儀式編』(目黒書店、一九四二)
(10) 但し奉安庫(又は奉安殿)が前提とされ「儀式就中国家的儀式は、国民的情操を涵養する絶好の機会」である「学校における祝日の儀式は、(奉安殿の―)内―長」開扉に始まり閉扉

に終わる」とされた。

- (11) この点について前掲『女子国民礼法図絵』では、礼法要項後編1編6章の「祝祭日」のうち学校儀式の注意点として「儀式はどんな名士や有志よりも、学校長を中心として行ふことである」(四八頁)としている。

- (12) 前掲中上川書

- (13) 同右

- (14) 同年以後、七月二十日は、次官会議により「海洋・海事思想の普及を図る」ことを目的として、「海の記念日」が定められ、通信省も「商船隊旗章令」を定めたが、『昭和の国民礼法』によればこれらは連動した動きであり、特に後者は、各船会社で思ひ思ひの様式によってなされていたため商船隊の慶弔に対して統一した礼式を定め、『海の国民礼法』の形式化をはかったとする『昭和の国民礼法』二二〇頁。

- (15) 長「政治文化としての国旗・国歌 今、日の丸・君が代問題を考える」『新しい歴史学のために』二三八、特集 追悼空間・国旗・史蹟、一二二二頁、二〇〇〇年六月、同、「愛国心の作り方」『歴史地理教育』六六四、二〇〇四年一月号) 参照。

- (16) 天皇写真の位置問題と表象の変化の意味については、長「家族イメージの構築と天皇・皇室像」比較家族史学会編『国民国家と家族』早稲田大学出版会、近刊予定参照。

- (17) もちろんその徹底が身体への暴力を伴った点は多くの回顧録が力説する点である。国民学校一年生であった山中亘は「何かのはずみで拝謁仰せ付けられるなどという事態になったら、意外にも極度の緊張で、直立不動の姿勢を取り、最敬礼をやらかしてしまふんじゃないか」(一二頁)とし、奉安殿―天皇写真への「最敬礼」が「内容以前に動物的訓練から条件反射的に習

慣化させた形式先行」のもたらす「効果」を指摘している。天皇写真の暴力性については、岩本努著『御真影』に殉じた教師たち』大月書店、一九八九、石田磨柱『御真影を死守したふたりの校長』宜野座通男一九八九に詳しい。一方、天皇写真と表象文化についての研究も盛んである。ただし本稿は前者については、占領期を対象として掲げること、天皇写真ではなく、モニメンタルな奉安殿の意味変化に注目している。また後者については、学校を場とした天皇写真の普及という点から見ると、天皇写真単独の分析ではなく、奉安殿とその空間、身体規律といった諸装置との関係やその変化についての構造的な考察が必要と考えている。

- (18) 宮津の学校日誌の資料としての性格については「宮津市域に残る学校日誌」(『市史編さんだより』17号、2001.3.16) 参照。宮津市域の小学校でも、卒業生が安定する事態は第一世界大戦後と考えられる(『宮津市史本文編』宮津市教育委員会、近刊予定)。なお地域資料を通じた卒業生変動の詳細については別稿で論じる予定。また本章で用いる学校関係記録はすべて宮津市文化振興室蔵版による。

- (19) なおこの時点での「下賜」校は、写真の永久性に問題ありとの理由で、一九三一年一月十二日に一斉に「奉還」し、一月二十三日に新写真を再下賜されている(養老校、宮津校、府中校各記録)。この点について文部省の動きは、前掲佐藤解説論文に詳しい。

- (20) 前掲『宮津市史本文編』
(21) 『府中郷土史』
(22) 日置『学校沿革史』
(23) 上宮津『沿革史』

- (24) 『自大正五年度 査察簿』
(27) 以下、宮津校『学校日誌』・養老校『沿革誌』の年度行事を記した日誌、上宮津校『年度日誌』の日々の記録を綴った年度別の日誌について出典を省略する。

- (28) 『世屋尋常小学校沿革誌』
(29) 「宿直規定」同右

- (30) 『校規』

- (31) 『学校沿革史』

- (32) 地域兵士の弔いについては、田中丸勝彦『さまよえる英霊たちー国のみたま、家のはとけ』福岡裕爾ほか編、柏書房、二〇〇二年、岩田重則『戦死者靈魂のゆくえー戦争と民俗』吉川弘文館、二〇〇三年。籠谷次郎『戦死者の葬儀と町村ー町村葬の推移についての考察ー』『歴史評論』六二八、二〇〇二年八月号などに具体的に論じられている。また戦没者慰霊については近年特に研究が盛んで、雑誌の特集号や共同研究の成果が相次いで発表されている。例えば前掲『歴史評論』「特集・戦没者をどう弔ってきたか」、『季刊戦争責任研究』37「特集・戦没者追悼をめぐる」二〇〇二年秋季号、川村邦光編『戦死者のゆくえー語りと表象から』青弓社、二〇〇三等参照。

- (33) 『沿革誌』

- (34) 『木子国民学校沿革史』

- (35) 『養老小学校改築落成記念誌』

- (36) 前掲『宮津市史 本文編』、またマリアナ基地からの米軍の作戦記録には、機雷投下を中心に、宮津への空襲記録が七件(一九四五年五月十六日、六月十九日、七月十一、十二日、八月五、六日、八月七、八日、八月十四・十五日)記載されているが、最終作戦を除き、すべて舞鶴が併記されている。小山仁示訳『日

本空襲の全容』東方出版、一九九五。

(37) 「年表」『宮津幼稚園百年のあゆみ』

(38) 前掲『日ヶ谷小学校誌』一五七頁

(39) 前掲『宮津市史 本文編』

(40) 前掲『日ヶ谷小学校誌』一七九―一八〇頁

(41) 『沿革史』なお、日々の日誌が明治三二年度から残されてきた上宮津校だったが、昭和二〇年度以後の年度日誌だけ存在しないため、以後の上宮津校についての記述は『沿革史』による。

(42) 『皇室雑載 s154―s221』国立公文書館蔵

(43) 同右

(44) 「公葬禁止について」一九四六年十一月六日

(45) 『沿革史』。なおこの時に学校名札と目録を添付した、とあり、各校に詔書類の記録が欠けていることと繋がると思われる。

(46) 日ヶ谷校誌

(47) 『由良国民学校沿革史』

(48) 佐藤前掲解説論文。なお教育勅語や天皇写真の回収と教育の戦後体制の構築といった感心から奉安殿撤去に言及した研究として、生田目靖志「占領軍の教育政策一端―御真影・教育勅語返納と奉安殿問題および校歌・校訓等の改廃指定に対する教育現場の対応―」『茨城キリスト教大学紀要』二七―三六、一九九六、小野雅章「御真影・奉安殿と戦後教育改革における天皇制の転成」『教育学研究』五七―四、一九九〇年十二月がある。小野論文は、SCAP文書のCIE史料の側からバーンズと関野の会談を紹介している。

(49) 北原恵「正月新聞における〈天皇ご一家像〉の形成と表象」『現代思想』二九一六、二〇〇一年二月

(50) (51) 前掲『皇室雑載』

(52) 飯塚喜市編著『二小学校教育現場に綴られた進駐軍通牒(資料編)』一九九二

(53) 『福島県教育史資料 第三集・四集』(福島県教育委員会、一九七二)所収

(54) (57) 前掲『皇室雑載』

(58) 前掲ボドナー、生井英考『負けた戦争の記憶―歴史のなかのヴェトナム戦争』三省堂、二〇〇一年等参照。